

## 希望を胸に

代田中・1 白井 瀬七

待ちに待ったオリンピック。何といっても日本は開催国だ。本来ならば、もつと盛り上がって、わくわくしたに違いないけれど、世界中で新型コロナウイルスが広まったことで、当初の計画がいろいろと狂ってしまった。医療の崩壊が懸念されているなか、お祭り騒ぎができる雰囲気でもないのはみんなが感じながら、それでもアスリートたちを応援しようと、テレビの前に座った人も多いと思う。僕自身、スポーツ観戦は嫌いではない。運動することも大好きだ。だからオリンピックにも興味があり、今日はどんな競技があるのかと、毎日、新聞のテレビ欄をチェックした。

オリンピックの前半、柔道の試合があった。金メダルをかけた試合らしく、家族はそわそわしながら始まるのを待っていた。しかし、僕は柔道のことをあまり知らない。やったこともなければ、技の名前もよくわからなかった。

「始まるよ、早く一緒に観よう。」

と声をかけられたけれど、ちょうど宿題をやっていた僕は正直あまり乗り気ではなかった。

「宿題なら、あとでやればいいのに。」  
と聞いたことのない言葉まで聞こえた。

「みんな強くて、かっこいいよ。強い心がかっこいい。」

と熱く語っていた。知らないうちに、僕も試合に見入ってしまった。大きな体、強い目力と体幹、柔道着を掴む手。選手たちの迫力にどきどきした。そして、いつしか自分もこぶしを握って声を出していた。日本人選手は負けていたが、それでも低い姿勢で相手をにらんで、一瞬たりとも目をそらさない。負けるものか、あきらめるもの

か、絶対渡すものか、という声が聞こえてきそうだった。汗だくで前を見る目は、迫力を越えて恐怖に近い。それほど気迫だった。時間は残り少ない。さあ、どうする。

そのとき、鮮やかな一本が決まり、畳に叩きつける瞬間を見た。試合後のカメラの前で、選手はさっきとは別人になった。くしゃくしゃな顔で、泣いている。

「絶対に勝てるという自信がもてるまで、苦しい練習を重ねてきたから、それを信じてただただ最後まであきらめなかった。」  
と彼は言った。それから、

「ここまで応援してくれたすべての人のおかげだ。」

とも言っていた。しばらく自分の熱も冷めないような気がした。

「いい試合が見られたね。」

という家族にただうなずいて、僕はさっきの言葉が頭から離れなかった。相手の選手だって銀メダリストだ。相当な練習を重ねてきたに違いない。負けた悔しさも計り知れないだろう。けれども、誰にも負けるわけがないじゃないか、といえるほど自分を鍛えてきたことを信じ、より強く自信をもった方が勝った。そんな気がした。

机に戻ったものの、何も手につかない。絶対的な自信がもてるまで、苦しくても頑張って、ようやくこれで大丈夫だ、負けるわけがない、と胸を張って言えるまで、何かに挑んだことがあったらどうか。努力をしたことがないわけではない。自分なりに、取り組みだことはたくさんある。でも、まだまだだってことかと、思わずつぶやいた。

中学生になり、やらなければならぬことが一気に増えた。勉強は小学生の頃より難しくなるし、テストや課題は頻繁にある。部活動も始まった。一年生はとにかく筋トレや走り込みの体力作りが多くて、毎日くたくたになる。そんなことを言い訳にしつつ、それでもなんとか毎日勉強をしたつもりだ。初めての定期テストはやっぱり頑張ったからだ。中間テストが終わってから、あつという

間に期末テストがあり、次はもつと上を目指そうと頑張った。図書館で勉強してみたり、塾の自習室を活用してみたりした。よし、これで大丈夫だ、と思うくらい勉強をしたつもりだった。順調に返ってきたテスト、けれど最後の一教科で予想外の失敗をしていた。自信はあったのに、なぜよく読まなかったのだろう、なぜ気づかなかったのだろう。しばらく何も聞こえないくらい落ち込んだ。頑張ったから悔しいのだ、とか、まだまだ始まったばかりだ、とか励ましてくれたり、たくさんほめてくれたりする家族に、笑顔を見せられるまで数日かかってしまった。思いがけず、あの日のことを思い出していた。

それから、たくさんの競技と試合を見た。そして気がついた。どの選手も負けない、強い気持ちをもっている。その強さを作るのは自分自身で、練習量が力になっている。強靱な体力と精神力、そして自信も必要だ。そうでなければ、あの場所には立てないのだろう。そこまですてメダルを取ることができる選手もいるが、もちろん取れない選手もいる。数年間かけてこの日のために、と鍛えてきたけれど、走ることができずに終わった選手もいた。それでも後悔がないという。やれることは全部やったといえるからだそうだ。もう、尊敬しかない。

僕は、まだまだやれる。またどんなことだって、頑張れるはずだ。なぜなら、まだ少し始めたばかりだからだ。応援してくれる、感謝すべき家族もいる。あとは、僕しだいなのだ。いつか僕も味わってみたい。後悔のないくらいやり切ったから大丈夫だ、という気持ちをも。この夏、オリンピックを見ることでできてよかった。希望をもたせてくれたアスリートたちに、感謝したい。